

史料報

第 32 号

昭和55年 3 月

村入用帳について

神 崎 彰 利

(明治大学刑事
博物館学委員)

(一)

小規模な施設ではあるが、日頃近世文書の整理に当たっている者の一人として、常に念頭から離れぬ二つの問題がある。一つは近世文書の古文書学的検討、いいかえると近世古文書学の確立で、もう一つは、近世文書の成立を追うということである。

前者は到底筆者の手のとどくことではないので、最近の関心は専ら後者にある。近世文書が、いつ、そしてどのような状況で作られるようになったか、ということである。ごく大まかにいって、近世文書にはその系譜が中世に求められるものと、近世の支配・被支配の対応から作られるまさに近世独自の文書とからなる。ここで対象とする村入用帳は後者に属す文書の一つである。

村入用帳とはどのような文書か、というような定義的なことについては今更過言を要しない。たとえば、かつての「近世地方史研究入門」以来、改めてこれに付け加えるものはない。

一方、村入用帳の研究をみると、その内容については幾例かがある。たとえば上杉允彦「近世村落の自治と村入用」(早稲田大学史学会編「史観」第75冊)はその代表例といえよう。また、地方文書を古文書学という観点からとりあげたものとしては、昨年刊行された「日本古文書学講座」7近世編Ⅱが最近の例としてあげられる。

ここで問題とする村入用帳成立という面からの研究は、菅原憲二「村入用帳の成立―近世村入用の研究・序説」(京都大学近世史研究会編「論集近

目次

- 村入用帳について……………神崎彰利…(1)
- 一つの宝篋印塔―「木村家文書」の整理を終えて……………藤村潤一郎…(4)
- 所在調査報告Ⅱ下野国河内郡町谷村渡辺家文書ほか……………(6)

- 「史料館所蔵目録一覽」の刊行……………(8)
- 第五回歴史資料保存利用機関連絡協議会参加記……………(8)
- 第二五回近世史料取扱講習会開催…(9)
- 五十四年度新収史料紹介……………(10)
- 既刊刊行物内容目次……………(11)
- 受贈図書・彙報……………(12)

世史研究」が村入用帳成立を正面から論じた代表的な研究事例といえよう。菅原論文は主に幕法と畿内における村入用帳の成立を追っているが、これによると、村入用に関する幕法は寛永十九年五月令が上限で、また現存する畿内の村入用帳は正保二年正月河内国茨田郡橋波村「申年諸事入用帳」が最も古いものといわれている。

ところで、右の諸研究を通してみても、残念ながら村入用帳成立についての具体的なイメージがでてこない。論理としては、菅原論文の指摘のように、寛永十九年幕法によってこの時期に村入用帳があった、ということは問題はない。近世の行政村

落確立の上限を寛永期総検にみる筆者としては、この時期の村入用帳の存在はむしろ積極的に認めるところである。行政村落が確立しなければ、村入用帳自体あり得るはずはない、というごく単純な考えが根底にあるからである。しかし、それではどの

ような村入用帳であったかとなると、この点はまだ明確でない。

菅原論文であげた正保二年橋波村「申年諸事入用帳」は、寛永二十年の「納米御蔵諸入用」と「御公儀御役入用物之覚」の書上げとその割賦が記されているという(前掲菅原氏論文)。これは後年の村入用の内容、あるいは通常いわれている村入用帳とは性格を異にする。しかしその反面、こうした内容をもったものが当時の畿内における村入用帳であったのかもしれない。寛永期の原初的な村入用帳、そしてその内容の御教示をまつものである。

(二)

村入用帳成立が必ずしも明確でない現在、その検討をより進めるためにはまず所論の多出が必要である。以下は、関東の天領に限定したその一つである。

筆者の独断としては、既述のように寛永期にその成立を求めたい。しかし、これが直接的に通常みられる

のではないかという疑問と、更に批判そのものに確實な論証がなされていないので、夫役の解体―夫役の銭納・米納化―村入用帳の成立は論破されていない。そしてその後、村入用帳成立については特に菅原論文を除いては正面からこれを論することなくして今日に至っている。

以上のような研究状況からみると、村入用帳の成立を追う場合幾つかの論点が考えられる。たとえば理論的な面からは、菅原氏がとられたような論法を領主・地域に応じてより深化する必要がある。それと共に、即物的な面からは村入用帳の系譜を追うことと、更に近世前期における夫役の検討は必須の課題の一つといえよう。

通常いふ村入用帳なる表現、この初現がいつかはまだ確言できないが、管見の範囲では寛永元年甲斐国山梨郡勝沼村（幕領）の「小前小入用帳」（勝沼町史料集成）は最も早期のものの一つと思われる。但し、村役出入文書にみられる表現であるため、残念ながら内容は全くわからないが、通常いふ村入用帳の先驅とみて差支えはなからう。菅原氏がいわれた正保二年河内国茨田郡橋波村「申年諸事入用帳」もごく早期に属すが、こ

右のことは結果として関東の幕領に偏在したが、この範囲内においても貞享・元禄期以前には村入用帳がなかったとは言いきれない。村入用帳という名称はないが、村入用帳がこの時期に全く新たに出現したとしてもその前提はあるはずである。言いかえると、村入用帳と同一の系譜に属し、村入用帳に代る帳は何か、ということである。その一例として領主に対する諸役と関係なく、村役を中心とした「万雑入用帳」、あるいはこれとは別に小物成と併記された「小入用帳」、本年貢を中心とした「万御公儀様御賄入用帳」に含まれ、後年の村入用に当たる諸費用の書き上げなど、こうした諸帳はいずれも村入用帳と同じ系譜に属す文書ではなからうか。独断あるいは偏見と言われるかもしれないが、年貢や村役が混在し未分離な状況から、まさに村入用のみが分離し村入用帳が確立する時期、それは地域によって違うが一つには貞享・元禄期頃なのではなからうか。

村入用帳の系譜を追う第一歩は、現在までに刊行された資料集や資料目録により、領主を単位とした村入用帳の存在を確認することから始まる。俗的で、労のみ多く、また非科学的であってもこの作業はさけられない。この点筆者はまだ手をつけはじめたばかりなので、正確なまた多くのことはいえないが、ごくあたりまえの感想として、元禄年間以前の村入用帳は稀にしか現存していない、

れまでの村入用帳とは性格を異にする。この後、いかにも村入用帳であると認められる事例としては、貞享四年相模国津久井領沢井村「卯夫割帳」(筆者編「南関東近世初期文書集」(1))元禄六年武蔵国秩父郡「太田部村申歳万入用帳」(埼玉県立文書館所蔵)である。いずれも幕領である。以後は宝永・正徳期に散見し、享保期からは一般によくみられるようになり、現存する村入用帳の通常の上限がこの

ではなからうか。独断あるいは偏見と言われるかもしれないが、年貢や村役が混在し未分離な状況から、まさに村入用のみが分離し村入用帳が確立する時期、それは地域によって違うが一つには貞享・元禄期頃なのではなからうか。

右のような考えを進めると、もう一つの問題として通常いう村入用帳の内容にも関連してくる。村入用帳の研究のなかで、村入用の内容Ⅱ村

入用の費目が論義の焦点になったことがある。論点は、村を維持・運営するためのいわば純粹の村入用と、年貢に関する費目との比重などにあった。結果の一つとして、地域により、あるいは極言するならば隣接する村相互でも内容に相異があるということが確認されている。この点にしても、村入用帳の系譜でその先行するものが前記のような性格をもった諸帳とするならば、年貢関係・村入用関係混在から村入用帳への進展の過程で、村によって取捨選択の基準に相異があった結果とはいえないだろうか。領主によって統一的に作成される諸帳とは違って、村側で作られる村入用帳の一性格であらう。

(四)

最後に夫役についてふれておきたい。今更改めて過言は要しまいが、本来的な意味での夫役は領主による農民の労働力の収奪である。こうした夫役とは別に、村内においては村の河川・道路工事などと、更に名主―百姓、百姓―隸屬農民、地主―小作という身分・階層性による広義の意味での夫役もある。ここで対象とするのは名主―百姓との間にみられる夫役である。

いうまでもなく、近世においては

領主と百姓、名主と百姓、おとな百姓とひらの百姓^(註)など、上位者の下位者に対する恣意的な夫役収奪は禁止されたが、実際には近世前期にはこの上下間の夫役をめぐってしばしば出入が発生している。この原因は、上位者の夫役に対する意識に問題があった。

地域によると思うが、近世前期には右の夫役と異なり、村役として名主―百姓の間に夫役がある。たとえば前にあげた貞享四年夫割帳の現存する相模国津久井領の場合であるが、元禄五年の一訴訟文書によると、津久井領では百姓が名主の田植や麦蒔をするのは前々のごとで、この地域の慣習であると記している(筆者編前掲書)。これは名主給が確定していない段階で、名主役という公事に対する農民の夫役奉仕である。

これと同様な事例が元禄六年八月下野国塩谷郡大原村にもみられるが、その文書をあげると、次のようである。

相渡申一札之事

一 今度七郎兵衛殿相果候ニ付 弟
勘一郎殿跡目名主御公儀様江願
上ヶ申候、就夫、先年名主江
百姓勤申やくハ、壹年ニ志^(註)ばか
り一日・作仕付時一日、又ハ、

田うえ之時不残すけ申答ニ御座候、何ニ而も先年も動きたり申候通、急度つとめ可申候、為後日一札如件

元禄六年

相百姓

酉八月十三日

五人組頭

弥五郎

同二郎右衛門

同次左衛門

同六左衛門

勘一郎殿

(明治大学刑事博物館所蔵)

大原村の名主交代に当たり、新名主と総百姓との間で交した約定書である。これによると、大原村では百姓が名主に対し、一か年に一日の柴刈りと作仕付、あるいは田植のすべてが「百姓勤申やく」となっていたことがわかる。先年とあるから古くからの継承といえるが、こうしたことが名主と隸屬農民との間ではなく、また名主個人の問題でもなく、名主と村役人・総百姓との間で村の公的な夫役として続いているわけである。前にあげた津久井領の場合と同じく、この大原村も名主役に対する総百姓の、いわば反対給付としての夫役であることは明らかである。

周知のように、領主からの名主給は村入用とは別のものであり、農民

負担の名主給が帳付けされる。名主役銭あるいは名主給米であるが、右の大原村の名主―百姓との間の夫役は夫銭・夫米に先行するものでありのちに夫銭・夫米に転化してはじめて村入用帳の一費目になることは改めて過言を要しまし。

以上の事例からして、名主役に対する百姓の夫役負担のあり方と、その解体が夫銭・夫米へと転ずることは疑いのない事実として認められよう。問題はこうした夫役による「百姓役」の存在がどのような地域に敷えんできるか、そしていつ頃夫役から夫銭・夫米化するかということであるが、この事実の抽出は今後の究明にまたねばならない。しかし原則論としては、名主への百姓役は地域を問わずいかなる村々にもあり得るものであり、それはまず夫役からはじまるが、夫銭・夫米化への変質は地域によって時代差があると考えられる。極端に言えば、畿内などでははじめから夫銭・夫米の場合もあり得るということである。相模国津久井領に近接し、立地条件もほぼ同じくする相州愛甲郡煤ヶ谷村(幕領)の場合、元禄六年現在、名主への百姓役は棟別割で百文と夫銭化してい

(以下9ページへ)

一つの宝篋印塔

―「木村家文書」の整理を終えて―

藤村潤一郎

下総国相馬郡川原代村木村家文書は昭和三四年度に書店を通して当館の所蔵となり、私は翌三五年夏に購入時の目録作成に従事した。既に二〇年以前の事である。三六年度以降購入文書は旧蔵者、旧蔵地別に文書名を付して整理しているが、当時は一括処理したので本来のと云うとおかしいが、木村家文書以外に金沢、越中、石見、肥前、下総、不明分などの文書が混在し、一応区別されながらも全部木村家文書として処理された。

木村家文書にしても川原代村字西道内の住だが、旗本土屋家の割元を勤めているので、知行地は下総、常陸国八ヵ村に及び、さらに川原代村は村内に一二以上の村（字・坪）がある。これがなかなか小字とわからず、従来一村名主の文書の整理を主としていたので閉口した記憶が残っている。

『史料館所蔵史料目録』第三十二集は木村家文書のみに限定したが、割元として文書を整理する事を完全

に意識したのは、用人名が比較的判明した最終段階であった。まことに愚かな事で二〇年の歳月と、その間の不勉強の程が身にしみた。

整理には同村の木村家の分家に当る池端木村家文書のマイクロ・フィルムによる収録が併行したが、作業の遅延のため同文書を十分活用できなかった。当館では一史料室（三名）毎に一史料整理室を共用する。私は同室内の一箱の書付類を担当文書でないと誤認し、昨年一〇月下旬に至りこれが木村家文書である事に気付いた。全く不注意と云う他はない。それでも関連文書をみた事は作業に大変良かったと思う。

現地では両木村家の御好意を賜り有難い事であった。この仕事は原蔵者、関連文書所蔵者の御好意がなければ出来ない。それも仕事が終れば、おつき合ひも終りとはできない。仕事を離れても全く別世界のご職業の方々のお話、奥様の旧家の生活のお話など伺えるのはこの仕事の有難い所だろう。

現地での作業で再認したが、文書の整理には、先ずその文書について出来るだけ予備知識を得ておく事が必要である。別に問題はなかったが、池端木村家に初めて参上した時に、私は手土産の調達を忘れて上野駅で文明堂のカステイラを買った。同家で文書の閲覧をお願いして手土産を出した所、菓子関係のご職業だと辞退されるのを無理にお納め願って、さてご主人様の事を伺うと木村屋総本店副社長との事で閉口した。

既に昭和四八年に当館に『パンの明治百年史』が寄贈されており、この本には木村家の事が言及されているのだから、注意すれば避けられた事であった。特に同僚はこの書物の事を知っていたから、私が知識の伝達を受けていなかったのは、矢張り不注意だろう。

予備知識について言えば、私は文書の整理に着手すると、カード化をあせり、文書の主だったものから一応の概要を把握してから着手する事をしない癖がある。前記用人名のリスト化もその一例である。私なりの仕事の進め方は体で覚えた面もあり、最早訂正出来ない点もある。そしてこれが私が愚鈍な人間だという証明になるだろうが、各人なりの仕事の

進め方というのでも許されるのではないかと考えている。

整理者にとって担当文書についての理解は、整理終了時が一番わかる時期だという問題があるが、矢張り一種のマーケティングサーチは行なわなければならない。

さて木村家には大きな宝篋印塔が一基あり、それには次の文章が彫まれている。

宝篋印塔一基、木村貞岡、字子幹之所建、状略記鳳卿、其略曰子幹之王父君曰貞次、為州之河代邑吏、自幼信佛年甫弱冠、日誦普門品壯歲誦誦大乘妙典、享年六十八歲卒、實丁延享甲子歲、生時誦誦經者凡一千七百一部、迺欲建塔以供養、未果、子幹之妣曰貞夢尼繼其志經營亦不果卒、歲四十五歲、宝曆壬申之夏四月二十三日也、子幹哀王父君及先妣之志雖憂服之中書寫法華併夫誦誦經造塔藏焉、在叺之東云鳳卿嘗誦陀羅尼經凡造塔之功說不可盡矣、其一曰是塔之所在有大神、驗殊勝威德能滿一切世間吉慶也、夫孝也者繼志為大焉、子幹能繼祖妣之志則其自求多福得冥助者必也不疑矣、是為塔記

宝暦三年之夏

鳴 鳳卿誌

関 思恭書

木村貞固建

建立者木村貞固は通称藤左衛門で安永五年六月五日に没している。祖父貞次は延享元年没、父はこれより先き享保一八年没である。祖父と母の信仰を慕って孫が建立した石塔である。関東平野の石のない所だから経済力の裏付けがあったらう。

文を撰した鳴鳳卿は弘化五年刊

「古今墨蹟鑒定便覧 近世儒家之部」

(森・中島編「近世人名録集成」四

巻六三頁)に成島鳳卿とあり「但来

ノ説ヲ悦ブ、又和歌ヲ善クス、宝暦

十年九月一九日ニ歿、年七十二」と

ある。彼は錦江、信濃、道筑などを

称し、「有徳院殿御実紀」には奥坊主

組頭で書籍事を掌し、同朋格になり

侍講している。將軍吉宗は就任以来

「御側近く召れ。日々の侍講をもつ

かふまり。しばしば御かへりみを蒙

り」(国史大系『徳川実紀』八巻三〇

一、七七八頁、九巻二三〇頁)とあ

る。文化一三年序、原善公道著「先

哲叢誌」巻之七には酒匂川の治水工

事に武蔵国川崎の田中丘隅を推薦し、

工なつての碑文を丘隅に代つて作文

し、また丘隅の墓記を撰している。

つぎに書の関思恭は安政二年刊、

川喜多真一郎編「古今墨蹟鑒定便覧

書家之部」(「近世人名録集成」四

巻二五一頁)に「字ハ子爾、通称源

内、鳳岡ト号ス」字ヲ太宰春台ニ受

ク、書ヲ細井廣次ニ從ヒ学ンテ能ク

シ頗ル時ニ鳴リ、其門ニ入ノ徒既ニ

五千人ニ余ルト、土浦候ニ仕フ、昭

和二年十二月廿九日歿ス、年六十九

とある。木村家文書には木村藤左衛

門宛の書状が三通ある。一通は次の

通りである。

為暑中御尋何寄之一品贈被下、忝

可致賞味候、愈々無御障珍重御事

候、手本之事詩相知レかね候得共、

大概相察春思二首も認候、今日御

申越候詩五七八首飛起申候、此折

本ハ是にて頂可被成、飛起候七八

首ハ又別折一本ニ可被成候、惣

躰遠國之門人衆此類之事知れかね

毎度間違申候間、御遣候折本へい

づれの詩五つれの詩迄と申事、

御書附可被遣候、左様無之候てハ、

重出之事毎度有之気の毒存候、御

存之ごとくおびたゝしき多数ニ候

へハ、此方にては記憶いたしがた

く候

一墨竹之事失念無之候

一名字号之事少しもくわすれ不申

候へども、誠寸陰之いとま無之、

心外之御事、今しばらく御かんに

んく以上

六月十四日 思恭

木村藤左衛門様

殊外取込候故、先二首書しんし候

以上

この書状は木村藤左衛門貞固が手

本を依頼し、関思恭と平素から交際

があつた事を示している。思恭が土

浦藩土屋家に仕官し、木村藤左衛門

が土浦藩の分家筋の旗本土屋家に関

係しており、江戸に出府する可能性

を考えれば両者の交遊は早くからあ

つたらうし、思恭の門人中には木村

藤左衛門のような各地の名主もいた

のだらう。

鳴鳳卿との交際は、川崎の名主で

ある田中丘隅と関係のあつた人物だ

から、矢張り各地の名主層の主だつ

たものと接触があつたのではあるま

いか。一般には関東の農村から江戸

の文化に対する憧れでもあらう。

なお石塔建立の動機の一つには、

前年母をなくし、当時嗣子に恵まれ

ていない家庭環境も考えられる。

一つの宝篋印塔でこのような事を

考えてみたが、宝暦期前後の木村家

文書の残存状態は余り良くない。文

書の欠を遺物で補うためにも、矢張り

整理に當つての現地調査は必要であ

る。また木村家文書は書店を通し

て購入されたから、当館分の購入時

の状態を考えれば、今後他の機関に

一部が保管されている事が判明する

かもしれない。

最後に整理中一九年以前に自分の

書いた整理用封筒の文字をみて、当

時の事を想い出さざるを得なかつた。

私事にわたつて恐縮だが当時私は臨

時職員だつたし、何事にも希望の持

ちににくい状態だつた。多くの方々の

ご好意により今日不十分ではあるが、

再整理の機会を得て史料目録を作成

する事ができた。改めて感謝したい。

史料所在、調査報告

下野国
河内郡

町谷村渡辺家文書

(現、栃木県今市市町谷)

本調査は、一九七九年八月二日～二四日の四日間に行われ、茨城大学文学部河内八郎教授に委嘱し、今市市史編纂室大橋東四郎・半田慶恭・斎藤康則・小平タカ子の各氏、栃木県藤原中学校教諭佐藤権司氏、栃木県史編纂室須永昭氏、茨城県磯原高校教諭黒崎秀人氏、および茨城大学文学部学生四氏の御協力を得て実施された。当館からは鶴岡実枝子、大藤修、深川美枝子の三名が参加した。

町谷村は今市宿から一里半、日光山へ三里半の場所に位置する「山寄之村方」(享和元年「差出明細帳」)であり、日光神領となっていた。渡辺家は初期を除き名主役を代々世襲している。当家には約三〇〇〇点の史料が残存しているが、今回の調査で目録化し得たのは一四二六点である。内容的には、村方の基本史料が各分野にわたって揃っているほか、交通・助郷関係史料や神領組売木人仲間の筏流し関係史料が多数存するが特色である。

町谷村の村高は二七九石余(反別

五九町余)で、うち田高一二石余(反別二町余)、畑高二六七石余(反別五七町余)となっており、大部分が畑地で占められている。戸口は家数四〇一六〇戸、人数二一〇一五五〇人の間を時期的に増減している。

元和六年の「日光山領目録」(東照大権現御神領目録)には町谷村の名は見えない。寛永十一年の「徳川家光判物」では、東照大権現御領と日光山領合わせて二二か村七〇〇石となっているが、村名の目録がない。しかるに、町谷村宛の寛永十一年の「御神領御成ヶ割付之豆」が残っている。町谷村は日光神領とされたのではなく、神領では物成はすべて石代納となっていた。承応二年の「町谷村年貢諸役定書」では、「百石ニ付拾四両物成」と定められており、同じ承応二年に定められた東照宮と大猷院の「配当目録」で、一両に付き二石五斗を石代収納の基準となる米価と定めているから、一〇〇石で四〇両に当たる收穫より一四両が年貢に取られる(三ツ五分物成)

ことになる。日光山への諸上納物(小物成)は村によって納入先も上納の品目も種々であるが、延享元年の「町谷村諸掛り物書上」によると、「東照大権現様御掛物品々」として御供米・御大豆・御供所御薪、御神馬用の荳大・草・ぬか等を上納することになっている。その他、伝馬・歩行・年貢上納夫や御供所水分人足・御宮掃除人足・御山荳人足等々の神領特有の諸役が賦課されている。

今市は江戸時代には、日光街道・例幣使街道や会津街道・日光北街道(白河通り)をも合わせた交通の要地であった。日光街道では元禄九年に定助郷制の成立をみており、町谷村は今市宿の定助郷村に指定されていた。そのため、「道中取締書請書」・今市宿との「人馬割合議定書」・「人馬割出帳」等助郷関係史料が多数残存している。

この地域の諸産業は農民の余業の中で特有なものに大谷川・鬼怒川の筏流しがある。領主林・御林の御用材伐出しや百姓林の伐木売出しは山間部農村の経済的支えとなっていた。そして、大谷川から鬼怒川への材木の川流し、筏組立ては村々の主な農民を「売木人」という副業経営者に発展させ、中・下層の村民を「筏上

乗り人」としてその輸送にたずさわらせた。特に一八世期末以降、広範な農民が、多くは雑木であるが、自らの持林の材木を筏出し、商品化することが活発になった。そして、持林の材木を領主の許可を得て伐出した多数の農民達は「売木仲間」を結成して自らの權益を守ろうとするようになった。渡辺家はこの売木・筏流しにたずさわっていたため、「売木仲間諸用控」・「諸方覚帳」・「山仕分帳」・「山仕出改帳」・「筏川下ヶ小形控帳」・「筏流人足賃払帳」・「払木入札覚」や売木人と河岸との争論関係史料が豊富にみられ、本文書が特色づけている。

以上の他に、川除普請関係史料や飢饉時の史料も多くみられる。なお「いまいち市史 史料編」近世Ⅱ・Ⅲ・Ⅳに当家の史料が一二四点収載されている。

今回の調査に当り、ご所蔵史料の閲覧を快諾され、多大の便宜を与えて下さった渡辺英郎氏、および調査の準備指導・設営に種々ご尽力を賜わった前記の諸氏、とりわけ河内八郎教授・今市市史編纂室の関係各位に深甚の謝意を表します。

所在史料 調査報告

美濃国
方県郡

古市場村国島家文書ほか

(現、岐阜県岐阜市古市場)

一九七九年一〇月一六日から一八日までの三日間、岐阜大学助教授松田之利氏のほか同大学の卒業生・学生一五人の御協力を得て、以下の二件について調査を実施した。当館からは、大野瑞男・山田哲好・安藤正人の三名が参加した。

旧美濃国方県郡古市場村国島家文書(岐阜市古市場 国島龍一氏蔵)

古市場は岐阜市の市街地から約三キロ、長良川の西岸に位置し、慶長一五年まで加藤氏の城下町であった黒野に隣接している。文化一二年の村明細帳(岐阜市史 史料編近世三)によれば、村高七三六石一斗七升八合、家数五八軒、人数二四一人という比較的小さな村で、ほぼ一貫して笠松役所支配下の幕領であった。

国島家文書は古市場村の庄屋・戸長役場文書のひとつである。大型の箆筒と木箱に入れて蔵の中にしまわれており、保存状態は良い。今回の調査点数は約二〇四〇点、その内、近世の冊子文書五七四冊、明治期の冊子八八八冊、割付・皆済状三〇八通で、残り約二七〇点は近世・近代

の一紙文書である。ほかに書簡・受取の類約一〇袋分が未整理である。全体として、いわゆる私文書の占める割合は極めて小さい。

以下、いくつかの項に分けて、本文書の概要を報告したい。

(1)本文書の最大の特長は、年貢・村入用関係の史料が豊富なことである。いくつかあげてみると、

年貢割付状	正保3―嘉永7	226通
年貢皆済目録	貞享2―安政3	82通
御年貢勘定帳	文政13―明治23	50冊
惣高免割帳	天保2―明治8	37冊
請合米帳	弘化3―明治7	27冊
負引帳	天保3―明治23	41冊
御年貢米郷蔵納庭帳	弘化3―明治23	40冊
高入引帳	天保2―明治7	33冊
金納割附帳	弘化3―明治6	27冊
下用銀取立帳	天保2―明治7	38冊
金納請取帳	弘化3―明治3	27冊
村小入用帳	寛政9―明治11	54冊
番代割帳	嘉永元―明治5	22冊
割付・皆済を除けば天保・弘化期以降に限られているが、庄屋役について時期と関連がある。なお、右の内、御年貢勘定帳は掟米勘定帳15		

冊(明治24—43)に、負引帳は掟米負引帳16冊(明治24—41)に連続している。明治末年にいたる史料の系統性を追える一例として興味深い。(2)その他の近世冊子文書で比較的多くまとまっているのは、

御用配賦書留帳	天保2—明治5	34冊
諸事下用帳	天保2—明治12	41冊
宗門人別改帳	嘉永6—明治2	14冊
家数人別増減差引帳	天保10—明治15	18冊
などである。御用配賦書留帳(御用		

刻されている。伊自良川通の堤川除御普請を中心とした普請関係の史料もかなり多い。名寄帳・高反別帳など土地関係史料は概して少ない。

(3)明治期の冊子文書では、水防関係史料が目立つほか、御布告留、村会議事録、村費収支帳、地券台帳など種々の村政史料が含まれている。

(4)一紙文書の中心は、堤川除普請関係の願書類や故郷送り手形である。注目されるのは美濃に特有の頭分制に関わるもので、「庇一件」と称する家作格式出入や氏神をめぐる脇百姓との出入など十数点の史料がある。

旧美濃国石津郡帆引新田村内田家文書(海津郡海津町内田俊郎氏旧蔵・岐阜県歴史資料館現蔵)

帆引新田は、薩摩藩の宝暦御手伝

普請で名高い千本松原の北、本阿弥輪中の中にある。丸山幸太郎氏の研究によると「岐阜県歴史資料館」創刊号、同村は高須城主小笠原氏の家臣であった土豪内田氏によって万治年間に開発され、村民はすべて内田氏の小作人として出発している。村高は享保期までが九五八石八斗六升三合、それ以降は一〇〇八石八斗六升三合で、ほぼ幕領笠松陣屋の支配下にあった。

本文書は、帆引新田の開発主で、代々同村の庄屋職を世襲してきた内田家の旧蔵文書であるが、一九七七年から岐阜県歴史資料館に収蔵されている。今回の調査では総計およそ四千点と推定されている内、約一三〇〇点の仮目録を作成した。詳しい内容は、いずれ同館から発刊されるであろう文書目録に譲るが、本文書の最大の特徴が、やはり堤川除御普請や輪中組合関係の史料にあることは間違いない。世襲庄屋としての立場から残された村政史料も豊富で、年貢・村入用・宗門人別などの各史料がよく揃っている。ほかに三百通近い質地証文・借金証文や小作人関係の諸史料は、内田家の一村一地主支配との関連で注目されるが、詳しくは前記丸山論文を参照されたい。

「史料館所蔵目録一覧」の刊行

全国に散在する近世・近代史料は夥しい量に達するであろう。当館では、とくに昭和45年度から、他機関などで作成された史料目録の収集と新規の所在調査を進めてきた結果、かなりの史料目録を収集することができたので、ここにその成果をまとめることにした。

史料目録が調査・研究に不可欠で、なおかつそれらが一覧できる「目録の目録」があれば便利であることはいうまでもない。しかし、この種の目録に関する情報が少ない現在、当館がこれまで収集した目録を刊行することはそれなりの意義があるであろう。本書の収録の範囲は、近世史(資料)、行政資料、郷土資料に関する目録で、特殊文庫でもその内容がこれらに属する場合は収録した。編集にあたっては、当館が所蔵しているものに限定し、書誌事項の正確を期した。また史料の概量をはかれるよう一冊ごとにページ数や枚数(ページ付のないもの)を示すなど、索引の編成を含めて利用の便宜のためできるだけ努力したつもりである。

史料目録は、単行書以外にも地方史誌類や逐次刊行物に収録されていたり、蔵書目録のなかに数点の近世・近代史料が収録されている場合もある。それらの一部は抽出してあるが、多くは割愛せざるを得なかった。これらは、いずれ続編としてまとめねばならないと考えており、そのための準備をすでに開始している。

なお、本書に収録した目録のなかには地方史誌編纂室などが業務上の必要から作成された部内資料の性格をもつものが含まれている。多くの方に情報を提供したいというご寄贈者の意をくんで、それらをあえて収録したが、本書を手がかりに史料調査を実施されるときは、まず史料目録の発行者への連絡・照会を是非とも励行されるようお願いしたい。本書が不十分ながらも史料目録の全国的体系的収集整備へ向けての第一歩とすることができたのは、多くの関係諸機関および関係各位のご協力によるものである。深く感謝するとともに、今後ともご理解とご協力をお願いする次第である。

第五回歴史資料保存利用機関連絡協議会参加記

歴史資料保存利用機関連絡協議会(史料協)の第五回大会は、昨年一月二一日と二二日の両日、神奈川県立青少年センター青少年会館を主会場として開かれた。当日配布された名簿によると、参加者は北海道から沖縄まで六一機関一二八人におよび、大変な盛況であった。会の運営にあたられた事務局と裏方の仕事を引き受けられた神奈川県立文化資料館の皆さんの御苦労を多としたい。

さて、会議の一日目は、総会のあと共通論題「歴史資料保存法制定勧告の実現方策について」をめぐる吉本富男氏(文書館)・西垣晴次氏(地方史研)の発題と討論があり、午後は「編さん事業と文書館」(官公庁文書の保存機関)の二つの分科会に分かれて、広田暢久氏(山口県立文書館)・近藤憲男氏(広島市文書館)の報告を聞いた。その夜、中華街で催された懇親会には残念ながら出席できなかったが、各地域の文書館・史料館の現状や史料保存運動の進み具合などは、二日目の地域ブロック別懇談会でかなり詳しく聞くことができた。大会で話し合われたこと

の詳しい内容は、いずれ発行されるであろう会報に譲り、若手会員のひとりとして感じた感想あるいは要望をひとつだけ述べさせていただきたい。

ここ数年、史料協の最大活動目標となつているのは、今大回の共通論題にもあげられた、いわゆる歴史資料保存法の制定問題である。今年四月には学術会議が新たな勧告を出すとのことでもあるし、史料協がこの運動において果たすべき役割は、ますます大きくなっていると思う。しかし、法制定のための実際的な運動と共に、史料取扱実務に関する地道な研究交流や、史料保存機関で働く職員の身分保障のための調査研究も、さらに推し進めていただきたい。おそらくそのような会員相互の研鑽なくしては、真に有効な歴史資料保存法を生み出すことはできないだろうし、何よりも、運動に加わったばかりのあるいは加わろうとしている新しい会員の期待に応えることができないのではないかと思う。大変なこととは思いますが、大会の持ち方を工夫したり、地域研究会などの企画を試みてはいかがだろう。(安藤)

第二十五回近世史料取扱講習会を開催

十、十一月、岐阜・東京二会場で

当館主催の表記講習会は、左記要項により二会場各四〇余名の受講者の参加を得て開催され、所期の成果を挙げて終了した。

〔開催要項〕

(一) 趣旨

公共機関などにおいて、近世史料を取り扱う事例の増大にともない、これに関する知識技能の向上が要請されている現状にかんがみ、当該関係者に近世史料の概要、読解、調査、収集、整理、分類、保存管理などに関する基礎的な知識技能を取得させ、近世史料の保存、利用などの効果を高めるためにこの講習会を開催する。

(二) 期間および会場

A 昭和五四年一〇月一五日(月)～一〇月一九日(金) 岐阜県歴史資料館

B 昭和五四年一〇月一五日(月)～一〇月一九日(金) 国文学研究資料館

(三) 受講者

図書館・文書館・博物館・研究所・史誌編さん室等の機関に勤務し、近世史料の整理および調査研究等に従事している者で、その経験年数の比較的浅い者。

(四) 講習題目と講師(敬称略)

A 岐阜会場

(1) 古代中世史料概論…中央大学文学部教授佐藤進一

(2) 近世史料概論…名古屋大学法学部教授平松義郎

(3) 近代史料概論…大阪大学法学部教授山中永之佑

(4) 近世の民俗資料…大谷大学名誉教授五来重

(5) 史料の保存科学…全日本博物館学会会長岩崎友吉

(6) 史料の補修…宮内庁書陵部専門官古関豊

(7) 近世史料特講

(8) 史料読解(村方・町方・幕藩)

(9) 史料の整理・管理

(10) 史料の分類

(7)・(10)…当館教官担当

B 東京会場

(1) 古代中世史料概論…東京大学文学部教授石井進

(2) 近世史料特講…京都大学名誉教授小葉田淳

(3) 近世史料概論…慶応義塾大学文学部教授中井信彦

(4) 近代史料概論…専修大学経済学部教授古島敏雄

(5) 近世の民俗資料…群馬大学教育学部助教授西垣晴次

(6) 史料の保存科学…全日本博物館学会会長岩崎友吉

(7) 史料の補修…宇佐美国宝修理所長宇佐美直行

(8) 史料読解(村方・町方・幕藩)

(9) 史料の整理・管理

(10) 史料の分類

(8)・(10)…当館教官担当

なお、両会場では、いずれも座談会と施設見学(岐阜県歴史資料館、国立史料館)等を実施。

○第二十六回近世史料取扱講習会の御案内

昭和五五年度の近世史料取扱講習会は左記の要領で開催の予定。詳細は追って地方公共団体・大学等を通して連絡いたします。

1 第一会場 京都府立総合資料館
五五年一〇月一三日(月)～一七日(金)

2 第二会場 国文学研究資料館
五五年一〇月二七日(月)～三一日(金)

(3ページよりつづく)

る(神奈川県史料編6 近世(3)幕藩1)。
以上、村入用帳について幾つかの感想めいたことを記してきた。要は、村入用帳はたとえば万難入用帳とも言える性格をもった年貢関係、村入用関係混在のものと同一系にあり、それが分離して村入用帳へ進展すること、名主役をはじめ、夫役の解体による夫銭・夫米への変質によって通常いう村入用帳が成立するということである。前にも記したが、独断と偏見、そして不統一な論の進め方、更に論証不足も少なくない。労の多い、地方文書検討の一つである村入用帳究明の一素材にもと思い、あえて駄文を記したが、多くの御教示を願えば幸である。

◎閲覧業務停止のお知らせ

書庫内の燻煮と図書点検の実施にともない、左記の期間の閲覧を停止する予定です。周知方をお願いいたします。

四月二一日(月)から
五月二日(金)まで

昭和五十四年度 新収史料紹介

⑥はマイクロフィルムによる収集を示す。

⑤上総国 黒田家文書

元禄一三年に大名に取立てられた

黒田氏の家譜・系図類を中心に、明治二八年編「雨城廻一滴」および明治五年以降の家扶日記などを収録した。系譜類は草稿を含むすべての撮影可能な史料を残らず並び、ほかに叙任関係の史料が加えてある。「雨城廻一滴」は、黒田氏が下館、沼田を経て寛保二年に久留里へ移封されてから以後を主対象とする家史であるが、史料集の色彩が濃い本書は、原史料の多くが失われてしまった現在では誠に重要なものである。それだけに、全三冊中の九冊が欠本になっているのが惜しまれる。

このほか、初代藩主直重の和歌・神道関係の史料のうちには、同人の常憲院殿供養願文や手簡留があり、また書状や邸宅図面など数点を合せて収録した。

なお、この収集は、これまで当館に寄託されて来た本文書が移動することになった(彙報参照)のを機会に実施したものである。本文書の詳細については受託の際の紹介(本誌

第14号)を参照されたい。(現蔵者Ⅱ 黒田経之氏。収録点数一三八点。六リール、三三八五コマ)

⑥甲府 坂田家文書

本文書は、武田時代から幕末まで甲府の町検断役・町年寄役を世襲した坂田家の所蔵にかかるもので、昭和四七年度(史料館報第18号参照)に次ぐ、第二次の収集である。

今回収集したのは、文化六年(明治六年)の御用日記六七冊、享保四年(明治二年)の町触留二三冊など町年寄公用記録類と、戦国期から近世初期の古文書二八通である。

前者については、前回の収集で、既に延宝六年(寛政一〇年)の御用留四〇冊、寛政一年(文化五年)の御用日記一〇冊ほかを撮影済みなので、坂田家所蔵の町年寄公用記録類は、一応すべての撮影を終了したことになる。次に後者は、天文一一年の武田信玄朱印状をはじめとする武田氏時代の古文書一通、それに天正一二年の徳川家奉行連署証文、慶長一〇年の平岩親吉物成皆済手形など近世初期の古文書一七通で、そのほと

んどは「新編甲州古文書」第一巻に収録されているものである。

なお坂田家には、このほか近世の一紙文書約八〇通、絵図類約四〇枚、『信濃叢書』(記録・問書類の写し)五一冊などが、なお未収集のまま残されていることを付記しておく。(現蔵者Ⅱ 甲府市大和町 坂田典信氏。三二リール、二〇八七七コマ)

⑥下総国 川原代村木村家文書

本文書は当館所蔵川原代村割元名主木村家文書の旧蔵者木村家に現在も所蔵されている史料である。文書の内容は過去帳・家相図・嘉永大地震記などである。詳細は今年度刊行の『史料館所蔵史料目録』三十二集に収載されているので参照されたい。ご協力いただいた木村氏に感謝します。(現蔵者Ⅱ 竜ヶ崎市川原代町 木村政昭氏、総点数二三三点、収録フィルム一リール、三三八コマ)

⑥下総国 川原代村池端木村家文書

本文書は昭和五三年度に当館でその一部をフィルムに収録した名主池端木村家文書を、今回再び追加収録したものである。木村氏には今回もご快諾下さった上、種々の便宜を與えてくださったことを厚く御礼申上

げる。前記木村家の分家である。

文書の内容は川原代村の貢租、明治期村政、用水、諸出入一件書付、それに旗本高札下書、御雑用金、御用状、用人書状、及び木村家の土地証文、借金証文、諸請取書、奉公人請状、書状、葬祭関係と、竜ヶ崎農商銀行関係書類などである。(現蔵者Ⅱ 竜ヶ崎市川原代町三六七〇 木村一郎氏、総点数二九六五点、収録フィルム二二リール、七五五一コマ)

真田家 中竹内家文書

享保二年から元文三年に至る十三冊の御用日記である。竹内家は二百石に同心二十人御預けの家格であるが、当時の職名は不明である。たまたま史料が残っている享保一四年に隠居・家督があるために、この年の前後では、同じく勤方日記であつてもその内容には少差がある。前半分には、町奉行にかかわると推定される松代の町方支配に関する事項が多く、後半分にはやや御側向の記事が目立ち、法令の書写も多い。

なお、当館では信濃国松代の貞田家文書を所蔵しているが、同文書には享保期の史料はほとんど含まれていないので、関連史料の一つとして古書店から購入したものである。

史料館
刊
『所藏史料目録』
『史料館報』

内容紹介(承前)*

◎史料館所藏史料目録(第21〜32集)
第二十一集(昭和四八年三月)

播磨国屋形旗本池田家文書目録

三河国深溝村八田家文書目録

旗本船越氏和州御用場文書目録

上野国東小保方村萩原家文書目録

第二十二集(昭和四八年三月)

伊豆国君沢郡長浜村大川家文書目録

第二十三集(昭和四九年三月)

近江国蒲生郡鏡村玉尾家文書目録

第二十四集(昭和五一年三月)

信濃国佐久郡下海瀬村土屋家文書目録

第二十五集(昭和五一年三月)

美濃国多芸郡島田村千秋家文書目録

第二十六集(昭和五一年三月)

下総国相馬郡藤代村飯田家文書目録(1)

第二十七集(昭和五二年三月)

下総国相馬郡藤代村飯田家文書目録(2)

第二十八集(昭和五三年三月)

信濃国松代真田家文書目録

第二十九集(昭和五三年九月)

伊豆国君沢郡内浦史料目録

第三十集(昭和五四年三月)

近江国蒲生郡八幡町山形屋西川家文書目録・三井高維蒐集史料目録

第三十一集(昭和五五年三月)

山城国京都久世家文書目録

山城国京都平松家文書目録
第三十二集(昭和五五年三月)

下総国相馬郡川原代村木村家文書目録

◎『史料館報』総目次(第17〜31号)

第一七号 昭和四七年一月 頁

文部省史料館の改組について……………(1)

金石文の調査……………金田正好……………(3)

「須田家文書」の整理を終えて……………

……………藤村潤一郎……………(8)

複雑な村方文書整理……………浅井潤子……………(10)

地方史(誌)編集刊行上の問題……………

……………伊藤忠芳……………(12)

史料収集から……………花田勝彦……………(13)

史料館改組関係法令……………

第一八号 昭和四八年三月……………

マイクロフィルム化史料の管理……………

……………原島陽一……………(1)

農村文書(三)——年貢割付と皆済……………

……………大野瑞男……………(4)

博物館における文書館としての……………

役割……………能嶋絃一……………(6)

行政資料について……………渋谷哲成……………(8)

第一八回近世史料取扱講習会に……………

参加して……………弘格……………(9)

近世史料目録の調査……………

第一九号 昭和四八年一〇月……………

史料の保存と研究……………井上勝生……………(1)

図書館併置の文書館的施設について……………三浦俊明……………(4)

松前町における町史編纂につ……………

いて……………榎森進……………(8)

「相良家文書目録」の作成を……………

終えて……………上田満子……………(10)

続維新政治史関係史料ノート……………

……………鎌田永吉……………(12)

第二〇号 昭和四九年三月……………

史料保存問題と研究者——井上勝生……………

論文にふれて……………色川大吉……………(1)

大川家の樟脳製造……………榎本宗次……………(4)

第二二号 昭和四九年一〇月……………

明治期の学校日誌——井上・色……………

川論争」に寄せつ——有泉貞夫……………(1)

「藤沢市文書館」の現状と課題……………

……………高野修……………(5)

近江湖東農村史料からみた名目金の……………

事例——鎮村庄屋日記より……………

……………鶴岡実枝子……………(7)

旗本家文書の所在調査について……………

……………第一史料室……………(14)

第二三号 昭和五〇年三月……………

「歴史資料保存利用機関連絡協議会」……………

の組織化と今後の問題——佐久間好雄……………(1)

国立史料館の史料所在調査に参……………

加して——その反省と問題点——……………

……………吉永昭……………(4)

所在調査報告Ⅱ三州滝川家文書……………

丹後地方農村文書……………(6)

所在調査Ⅱ旗本家文書(その1)……………(8)

第二三三号 昭和五〇年一二月……………

古文書と私……………相原隆三……………(1)

「村」と村方騒動——信州佐久郡……………

下海瀬村……………大野瑞男……………(3)

史料所在調査報告Ⅱ真田家文書……………

出羽国角間川本郷家文書……………(6)

史料のマイクロ写真化と撮影基準……………(8)

第二四号 昭和五一年三月……………

山形県史編さんと地域史研究……………

……………梅津保一……………(1)

「飯田家文書」の整理を終えて……………

……………藤村潤一郎……………(4)

近世史料目録の調査・収集と……………

今後の課題……………山田哲好……………(6)

歴史資料保存利用機関連絡協……………

議会創立大会に出席して……………鎌田永吉……………(8)

第二五号 昭和五一年一〇月……………

「東京市史稿」の編纂について……………

……………菊池昭……………(2)

農村文化と茶道——「千秋家文書」……………

の整理を終えて……………浅井潤子……………(5)

第二六号 昭和五二年三月……………

東寺百合文書の整理について……………

……………上島有……………(1)

所在調査報告Ⅱ山形県大石田町……………

高桑家文書ほか・安房国荒川村……………

高梨家文書……………(4)

史料紹介Ⅱ京都「諸州国々飛脚……………

便宜鑑」について……………藤村潤一郎……………(6)

第二十七号 昭和五十二年一〇月

農書校注の経験……………古島敏雄…(1)

史料と蔵書印のこと……………原島陽一…(4)

銀座史料「諸国灰吹銀寄」に
ついて……………榎本宗次…(6)

年貢皆済目録の成立……………大野瑞男…(7)

史料館資料利用規程……………(10)

第二十八号 昭和五十二年三月

大阪編年史料刊行について…藤本 篤…(1)

所在調査報告Ⅱ茨城県那珂郡

大宮町四倉家文書ほか・静岡

県浜名郡新居町戸長役場文書ほか……………(4)

寛永期の「吉利支丹記請文」から

みた京都六角町の住民構成……………(8)

……………鶴岡実枝子…(8)

第二十九号 昭和五十二年九月

九州の石炭鉱業史料について……………(1)

……………秀村達三…(1)

「真田家文書」の整理を終って……………(4)

……………原島陽一…(4)

史料とラベル……………原島陽一…(7)

近世史料目録の調査・収集報告……………(9)

第三〇号 昭和五十四年三月

近世史料体系化への途……………中井信彦…(1)

外国文書館見て歩き——昭和五

三年度在外研究報告——大野瑞男…(4)

所在調査報告Ⅱ山梨県南巨摩郡

諏訪町原田家文書ほか……………(7)

「豆州内浦史料目録」の作成を

終えて……………大藤 修…(8)

歴史資料保有利用機関連絡協議

会の第四回大会に出席して……………(10)

地方史関係雑誌の収集について……………(12)

……………図書委員会…(12)

第三十一号 昭和五十四年九月

漁村史料の伝来について…網野善彦…(1)

史料館蔵書の発刊……………(4)

所在調査報告Ⅱ兵庫県姫路市・

姫路酒井家文書……………(5)

旧い蔵書印とラベル……………原島陽一…(6)

寛文期の算用帖からみた江戸の

「近江店」……………鶴岡実枝子…(8)

*本号収載以前については「史料館報」

第16号(昭和47年3月)に収載。

**新収史料紹介・受贈図書・雙報等の

定例記事は省略。

改訂増補梧竹目録(徳島県立図書館)

香川大学増加図書目録 昭和五十二年度版

九州石炭鉱業史料目録 第五集(秀村

選三)

昭和四十七年「古文書等緊急調査」到津小

山田文書目録(大分県教育委員会)

昭和四十八年度「古文書等緊急調査」到津

近世文書目録(同右)

市立旭川郷土博物館所蔵品目録

史料目録 6・7(茨城県歴史館)

取手市史資料目録 第二集

現代政治史資料目録 1(国立国会図書

館)

国分寺市史料目録(1)

御殿場市史資料所在目録 第十四集

鳥取県立博物館所蔵目録 20・21

長州藩士桂家文書(研究叢書9)(立正大

学経済研究所)

宇佐市史編纂基本史料目録 第三集

長野県教育史 第一・十三卷(長野県)

鳥取県史 第十二卷

豊島区史 資料編三

大館市史 第二卷

芹沢銈介の蒐集(サントリ―美術館)

城下町仙台の人とくらし展図録(仙台市

博物館)

東北の武家のしるし展図録(同右)

歴史公論 元祿時代の社会と文化(雄山

閣)

太陽コレクション 土農工商 Ⅱ(平凡

社)

日本史の謎と発見 10(毎日新聞社)

山形県議会百年のあゆみ

大地に緑の塔を——茨城県議会百年の歩

み——

史跡門田遺跡(八王子市教育委員会)

八王子の文化財みて歩き(同右)

世田谷の中世城塞(世田谷区教育委員会)

静岡市制九十周年記念写真集(静岡市)

牧堰門池用水沿革史(沼津市門池牧堰用

水運営委員会)

鳳来寺山文献の研究(愛知県郷土資料刊

行会)

暖簾考(日本書籍)

宮崎県郷土資料利用の手引 第四集(宮

崎県立図書館)

関西大学東西学術研究所集刊 11の1

青森県立郷土館調査報告 第四・五・六

集

文化財調査報告 第24集(北上市教育委

員会)

山形市史資料 第55号

上山市史編集資料 第二十七集

天童市史編集資料 第12・14号

狭山市史編さん調査報告書 7

市史編さん調査報告 第十七集(東松山

市)

江戸川区郷土資料集 第十集(江戸川区

郷土資料室)

受贈図書

昭和五十四年度(二)

広島市公文書館所蔵資料目録 第一集

蔵書目録 第九卷(鳥取大学附属図書館)

明治大正図誌 12(筑摩書房)

西宮あれこれ(西宮市)

狛江市史料集 第九集

(東京都) 羽村町史料集 第四集

明治大学刑事事博物館資料 第三集

多摩市文化財調査資料 2 (多摩市教育委員会)

日野市史 史料集 第四集

高木家文書調査報告 VI (名古屋大学附属図書館高木家文書調査室)

資料調査報告書 第六集(鳥取県立博物館)

沖繩県史料 近代2(沖繩県教育委員会)

岐阜市史 史料編 近世3・考古文化財

東海市史 資料編 第3巻

和歌山県史 近現代史料 5

岸和田史 第7巻 史料編II

山口県史料 中世編上(山口県文書館)

白石市史 通史篇

(福島県) 棚倉町史 第五巻

茨城県史料 考古資料編

群馬県史 資料編19

墨田区史 上

(石川県) 志賀町史 資料編 第四巻

蕨崎市誌 上・中・下巻・資料編

茨城県議会史 資料編・戦後編

郷土百年茨城県議会百年写真集(茨城県議会事務局)

龍野市史 第一巻

二本松市史 第五巻 近世II 資料編3

東京市史稿 市街篇 第七十・産業篇

第二十三

統高松市史年表 第一巻

山形県史 資料篇15下

熊本県議会史 第五巻

(熊本県) 天草町郷土誌

東京都職制沿革(東京都公文書館)

大田区史年表

新修港区史

武生市の文化財(武生市教育委員会)

中野区内の文化財江古田の獅子舞ほか数篇(橋本喜一)

喜代沢遺跡発掘調査概報(青海市遺跡調査会)

横浜の文化財(横浜市文化財現況調査団)

横田穂之助日記(福生市教育委員会)

福生村誌稿・熊川村誌稿(同右)

瀬戸内の海軍史料調査報告 第一集

(瀬戸内海歴史民俗資料館)

瀬戸内の海上信仰調査報告(東部地域)

(同右)

画報日本近代の歴史 1(日本近代史研究会)

凶録農民生活史事典(柏書房)

守屋舎人日記 第一巻(文献出版)

中学図説社会科わたしたちの地理 日本編2(学習研究社)

国立国語研究所三十年のあゆみ

井当箱にみる用と美(埼玉県立博物館)

目でみる浜松の歴史(浜松市博物館)

源氏物語図録 蓬左文庫(名古屋市教育委員会)

委員会)

豊橋の歴史と文化展 コレクション展

(豊橋市美術館)

鳥取県の自然と歴史 展示解説(鳥取県立博物館)

はこぶ展——生活と運搬——(沼津市歴史民俗資料館)

根来塗——朱の世界——(サントリ美術館)

仏教美術コレクション展(小松市博物館)

仙台藩の家臣団 展示解説(東北歴史資料館)

江戸時代後期における大工組に関する研究(渡辺勝彦)

仙保の板碑展——多摩川上流の中世を求めて——(青海市郷土博物館)

豊橋美術展 豊橋市美術館開館記念特別展

清水信元思出集(清水信元)

小松市立博物館 二十年のあゆみ

アイヌ民俗文化財緊急調査報告書 無形民俗文化財4・有形民俗文化財3(北海道教育委員会)

ウイリタ民俗文化財緊急調査報告書(1)(同右)

道北地方のチャシ 名寄叢書 第三巻

(市立名寄図書館)

伊豆沼古窯熊狩A窯跡発掘調査報告(東北歴史資料館)

北歴史資料館

秋田城跡 付史料集(秋田市教育委員会)

(山形県) 西川町史編集資料 第七号(西川町教育委員会)

古河市史資料 近世編(古河市史編さん委員会)

竜ヶ崎ニュータウン埋蔵文化財調査報告II(茨城県教育財団)

南守谷地区土地区画整理事業地区内埋蔵文化財調査報告 II(同右)

鹿島線内埋蔵文化財調査報告(同右)

常磐自動車道敷地内埋蔵文化財発掘調査報告 I(同右)

茨城県教育財団文化財調査報告 I(同右)

埼玉県遺跡発掘調査報告書 第二十集

(埼玉県教育委員会)

袖ヶ浦町伊丹山遺跡(伊丹山遺跡発掘調査団)

羽ヶ田上・山根坂上遺跡 I(羽村町羽ヶ田上・山根坂上遺跡調査会)

目黒区の名墓と供養塔——石造文化財の三——(目黒区教育委員会)

福生市文化財調査報告 (第二・四集)

(福生市教育委員会)

福生市文化財総合調査報告 VI(同右)

東京都福生市文化財調査報告 VI・VII・IX・X(同右)

狛江市文化財調査報告書 第一集(狛江市教育委員会)

大田区の文化財 第六集(大田区教育委員会)

相州三浦郡秋谷村(若命家)文書 下巻

〔横須賀市立図書館〕

下越地方の城館跡〔花ヶ前盛明〕

内陸地域産業・文化の総合的研究〔信州

大学人文学部・経済学部特定研究研究

班〕

〔静岡県〕 韮山町史 第一巻 考古篇

国鉄東海道線路敷内埋蔵文化財発掘調査

報告書〔浜松市教育委員会〕

真宮遺跡調査概報 4〔岡崎市教育委員

会〕

新修大津市史 古代 第一巻

かめおか〔亀岡市〕

高陽町史〔広島市役所〕

対馬の美術〔西日本文化協会〕

熊本県文化財調査報告 第三十三集〔熊

本県教育委員会〕

宮崎県文化財調査報告書 第二十一集

〔宮崎県教育庁〕

薩摩地区有形民俗資料調査報告書〔明治

百年記念館建設調査室〕

人力車〔産業技術センター〕

北方言語・文化研究会成果報告〔早稲田

大学語学教育研究所〕

広池千九郎先生の生涯〔広池学園〕

明智・細川と両丹地方〔京都府立丹後郷

土資料館〕

内閣文庫所蔵江戸時代災害資料展示目録

〔国立公文書館〕

新版日本歴史スライド 7-9〔日本教

図〕

〔群馬県〕 笠懸村誌基礎資料 第一-五

号〔笠懸村誌編纂委員会〕

船橋市郷土資料図録 板碑〔船橋市教育

委員会〕

〔埼玉県〕 寄居町史編さん調査報告 第

三・四集〔寄居町教育委員会〕

府中市自然調査報告 第八次調査〔府中

市教育委員会〕

文化財資料集 (7) 石仏編〔東久留米市

教育委員会〕

文化財総合調査中間報告 I〔福生市教

育委員会〕

福生市長沢遺跡発掘調査概報〔福生市長

沢遺跡発掘調査会〕

泰平御江戸絵図〔東京都〕

秦野市史史料叢書 1〔秦野市史編纂室〕

豊臣時代大阪城遺構確認調査概報〔大阪

城天守閣〕

大阪城南外濠々底遺構発掘調査概報〔同

右〕

二條家御殿造営勘定帳〔中村保良〕

静岡市史 近世

和歌山市史 第八巻 近現代史料II

福井県議会史 第三巻

金沢文庫資料全書 仏典第三巻

日光叢書 社家御番所日記 19〔東照宮

社務所〕

岩見沢市史資料 第五集

文化財調査報告 第二十五集〔北上市教

育委員会〕

津山洋学資料 第一集〔津山洋学資料館〕

三条市史調査資料〔近世編〕 第五・六

集〔三条市〕

〔茨城県〕 筑波町史 史料集 第二篇〔筑

波町史編纂委員会〕

東大阪市史資料 第六集(4)〔東大阪市〕

仙台市文化財調査報告書 第十四-十七

集〔仙台市教育委員会〕

内陸地域産業・文化の総合的研究〔信州

大学人文学部〕

秋田県立秋田図書館所蔵〔秋田藩家蔵文

書〕対照索引

鶴岡市立図書館鶴岡市郷土資料館郷土資

料目録〔昭和五三年三月三十一日現在〕

歴史資料館収蔵資料目録 第八集 県内

諸家寄託文書IV〔福島県文化センター〕

小山市史料所在目録 第一・三集〔小山

市史編さん委員会〕

太田市史編集資料 第一-八集〔太田市

史編集室〕

群馬県近世史料所在目録 9〔群馬県

教育委員会〕

常陽の村落史料目録 常陸国新治郡中

根村 一 本稿こと家文書 一 常陸国

新治郡中根村 一 平島清家文書目録

〔立正大学古文書研究会〕

明治大学刑事博物館目録 第49号

学習院大学史料館所蔵史料目録 第四号

長野県郷土資料総合目録 昭和四八年一

月一日現在〔県立長野図書館〕

長野県公文編纂及行政資料目録〔明治

編・大正編・昭和編・絵図面編〕増補

改訂〔長野県〕

岐阜県所在史料目録 第五集 遠山家文

書目録〔岐阜県歴史資料館〕

沼津市歴史民俗資料館資料集 1 古文

書(1) 小海増田家文書目録

高木家文書目録 巻二〔名古屋大学附属

図書館〕

関西大学図書館シリーズ 第十七輯 関

西大学所蔵撰津国嶋上郡高浜村西田家

文書目録

県政資料総目録〔昭和四七年〕・〔追

録〕昭和四九年〕・〔追録〕昭和五二

年〔兵庫県企画部統計課県政資料室〕

姫路市立図書館郷土資料目録 第一集

東大寺文書目録 第一巻〔奈良国立文化

財研究所〕

山口県文書館地方調査員調査報告 6

〔山口県文書館〕

山口県行政文書目録 戦前の部〔同右〕

郷土諸家目録 3・4〔愛媛県立図書館〕

愛媛県行政資料目録〔藩制期・明治期篇〕

〔同右〕

愛媛県内公私立博物館所蔵愛媛県博物館

資料総合目録 第二集〔愛媛県立博物

館〕

九州大学九州文化史研究所所蔵古文書目

録 10-12

大分県立大分図書館所蔵大分県行政資料
目録 第二集 (県立大分図書館)
大分県郷土資料所在調査目録 第一輯

〔同右〕

大日本史料 第二編之二十・第八編之三
十一・第十編之十六・第十二編之四十

八〔東京大学史料編纂所〕

大日本古文書 家わけ第十八〔同右〕

大日本古記録 小右記 9〔同右〕

大日本近世史料 編脩地誌備用典籍解題

6〔同右〕

大日本維新史料 類纂之部 井伊家史料

11〔同右〕

保古飛呂比 佐々木高行日記 11・12

〔同右〕

日本関係海外史料 イギリス商館長日記

原文編之中・訳文編之下〔同右〕

Korean Culture Series 7・8〔国

際文化財団〕

上山市史編集資料 第二十八集〔上山市

史編さん委員会〕

青梅市史料集 第二十四・二十五号

〔青梅市〕

佐倉市史 巻三

刈谷町庄屋留帳 第五巻〔刈谷市教育委

員会〕

愛知大学総合郷土研究所資料叢書 2

三州渥美郡馬見塚村渡辺家文書御用留

1

史料叢書 15・17〔下関文書館〕

埋蔵文化財発掘調査概報 一九七九〔京
都府教育委員会〕

松山市文化財調査報告書 第十二・十三

集〔松山市教育委員会〕

宮崎県史料 第五巻〔宮崎県立図書館〕

大和市史 5 近現代資料編上

福山市史 下巻

知立市史 下巻

豊田市史 七巻

岡崎市文化財図録 第一集〔岡崎市教育

委員会〕

岩槻市史年表

新紋別市史 上巻

明治大正図誌 7・17〔筑摩書房〕

文化財講座日本の美術 16 古文書〔第

一法規〕

古文書参考図録〔柏書房〕

国立国語研究所資料集 10・12

特別陳列 密教図像〔京都国立博物館〕

〔岩手県〕石鳥谷町史 上巻

宮城県図書館資料 1・2〔古文書を読

む会〕

越谷ふるさと散歩 〔上〕〔越谷市史編さん

室〕

八幡山遺跡〔世田谷区教育委員会〕

松原遺跡〔同右〕

上之台遺跡〔同右〕

解題書目 第十集〔青森県立図書館〕

村山市史編集資料 第六号〔村山市史編

さん委員会〕

新庄市萩野広野家文書 第四集〔新庄市
教育委員会〕

天童市史編集資料 第十五号〔天童市史

編さん委員会〕

〔山形県〕最上町史編集資料 第三号〔最

上町史編纂委員会〕

御殿場市史史料叢書 3〔御殿場市史編

さん委員会〕

栃木県史 資料編考古2・史料編中世4

編年百姓一揆史料集成 第三巻〔三一書

房〕

統計資料シリーズ No. 3・4・6・8・

9・11〔二橋大学経済研究所日本経済

統計文献センター〕

内閣文庫影印叢刊 虫附損毛留書 中

日本外交文書 大正期 第三十九冊〔外

務省〕

続海事史料叢書 第四巻〔日本海事学

会〕

経済史文献解題 昭和五三年版〔日本経

済史研究所〕

明治大学刑事博物館資料 第四集

神宮御杣山記録 第四巻〔神宮司庁〕

関西大学東西学術研究所集刊 10・11・

2

国際公文書館週間記念日本および諸外国

の公文書館展示目録〔国立公文書館〕

図説歴史散歩事典〔山川出版社〕

港町 潮風の中に息づくふるさと旅情

〔嵯峨教育図書〕

北上市史 第五巻 近世〔3〕

〔福島県〕河東町史 上巻

八潮市史 史料編 別巻

図録ふるさとの歴史と自然を訪ねて〔君

津市立久留里城址資料館〕

すみだ いまとむかし〔墨田区〕

府中市史総索引〔府中郷土資料索引〕〔府

中市立図書館〕

神奈川県史 資料編3・8・20

藤沢市史料集 〔4〕〔藤沢市文書館〕

小牧市史 本文編・資料編1・3

長野県上水内郡誌 現代篇〔上水内郡誌

編集会〕

新修稲沢市史 資料編1

新修大津市史 第二巻 中世

岸和田市史 第一巻 自然考古編

洪沢敬三 上〔洪沢敬三伝記編纂刊行会〕

山形市史資料 第五十六号〔山形市史編

集委員会〕

田無のむかし話 その三〔田無市〕

〔埼玉県〕大滝村誌 資料編 6

松阪市史 第八巻

国典類抄 第七巻〔秋田県立秋田図書館〕

〔愛知県〕長野村史 資料編19・32・38

〔土方春代〕

郷土こくぶんじ〔国分寺市〕

史料調査報告 第一・二集〔足利藩研究

会〕

海南市史 第三巻 史料編1

〔以下次号〕

報

○昭和五十四年度事業(その二)

一、史料の収集

今年度の史料収集は、上総国久留里黒田家文書(大名)・甲斐国甲府坂田家文書(町年寄)・下総国相馬郡川原代村木村家文書(割元名主)・同村池端木村家文書(名主)のマイクロ・フィルムによる収録と、信濃国松代竹内家文書(真田家家中)を購入した。各文書の概要については、本号収載の「新収史料紹介」の項を参照。

二、史料の所在調査

本年度の所在調査は、既報のように栃木県今市町谷渡辺英郎氏所蔵文書について、五十四年八月二一・二四日の間、茨城大学河内八郎氏に委嘱し、今市市史編纂室のご協力を得て調査を実施。つづいて五十四年一〇月一六・一八日の間、岐阜大学松田之利氏に委嘱し、岐阜市古市場国島竜一氏所蔵文書ほかの調査を実施した。概要は本号収載の所在調査報告を参照されたい。

以上のほか、当館では各地で調査・印行されている近世史料目録の収集を進めているが、本年度はその一環として茨城県歴史館より目録約二五〇冊を借受け、これのコピーを作成した。多数の目録の貸出・複写を快諾・ご便宜を与えて下さ

った茨城県歴史館に厚く御礼を申し上げます。

三、第二五回近世史料取扱講習会実施

本年度の講習会は五十四年一〇月一五・一九日に岐阜県歴史資料館、十一月五・九日に国文学研究資料館で開催された。実施に当り、会場提供をはじめ運営万般にわたってご協力・ご援助をいただいた岐阜県歴史資料館の各位に深謝いたします。

四、刊行物

1 『史料館所蔵史料目録』第三十一集に「山城国京都久世家文書・同平松家文書」を、同第三十二集に「下総国相馬郡川原代村木村家文書」を収録。

2 『史料館叢書』1・2として「寛文朱印留」上・下巻二冊を印行。

3 『史料館所蔵目録一覽(近世史料)』

郷土資料の部(本号8頁参照)
 4 『史料館報』第三十一号(五十四年九月)、同三十二号(本号)

○評議員会

本年度評議員総会は国文学研究資料館において、五十四年七月二〇日・五十五年三月七日の両度開催され、管理運営の概況、五十四年度事業の中間報告、五十五年予算の内示・概要などの議事が評議された。

○受託史料の返還

昭和四十六年以来、当館が受託保管してきた上総国久留里黒田家文書は、昨五十四年九月三〇日付を以て寄託契約を解除した。なお同文書は、黒田氏が寛保以来居城とした久留里城址資料館(君津市立)へ寄託されて保存することになっている。

○研究会

第三六回(54・10・9)

地方史関係目録の刊行について

史料館叢書1・2

寛文朱印留(上・下)

当館所蔵「寛文朱印留」は、寛文四年に発給された將軍家綱の大名宛領知判物・朱印状および目録、翌五年頒布の公家・門跡、神社・寺院宛の領知判物・朱印状のすべてを網羅した写本である。今回、厳密な校訂を施し、各種の索引を付して同時刊行。A5判 上・本文三〇五頁・解説索引 四二頁・定価七千円 上製本 下・本文三四六頁・索引等 七六頁・定価八千円

山田 哲好
 第三七回(54・12・4)
 久世家文書・平松家文書の分類について

原島 陽一
 第三八回(54・12・13)
 川原代村木村家文書の分類について

笠谷和比古
 第三九回(55・2・14)
 『史料館叢書』の刊行計画について

藤村潤一郎
 第四〇回(55・3・6)
 中世古文書学の課題

上島 有
 第四一回(55・3・13)
 近世米価時系列作成上の諸問題

岩橋 勝

史料館報 第三二号

昭和五十五年三月二日発行

編集・発行

東京都品川区豊町一ノ二六ノ一〇

国文学研究資料館内

国立史料館

電話(七八五)七一一(代)

印刷所

東京都文京区小石川一ノ三ノ七

勝美印刷株式会社

電話(八二二)五二〇一(代)